夢に向かって

西原小学校　五年二組　畑崎　佑真

しょう来なりたいものに向かって一生けん命努力し前へ進んでいくデビーは、本当に強い心の持ち主だ。何かになりたいと思う時、大切なのは才能ではなく、心の底からそれになりたいと願う強い思いなのだということを感じる本だった。

世界一のピアノ調律師のおじいさんに育てられた少女デビーは、どんな音楽よりも、ピアノを調律する音が好きだった。夢は、おじいさんのような立派な調律師になること。デビーの夢に向かう強い思いが、周りの人の心を動かしていく話だ。

ぼくの姉はピアノをしているので、調律師さんがピアノを調律する音を聞いたことがある。その音は、ぼくには素晴らしい音楽には聞こえなかった。ピアニストが演奏する音楽は、きれいだとは思う。だから、おじいさんがデビーにはもうすこし良い仕事に就いてもらいたかったと言った気持ちは分かる気がする。かげで誰かを支える仕事ではなく、人の前に出る仕事をして欲しかったのだろう。しかし、世界一のピアノ調律師のもとで育ってきたデビーは、その仕事の素晴らしさを知っていた。ピアニストから感謝され、多くの聴しゅうに良い音を聴いてもらえる仕事への誇りを、おじいさんから感じていたのだと思う。

サッカーの本田選手は、夢を持つことは本当に楽しいこと

だと言っていた。ノーベル賞を受賞した山中先生は、ヴィジョンを持つことが一番大切だと言っていた。ぼくは、将来どうしてもなりたいと思うものがまだ決まっていない。だから強くいられるデビーがうらやましくさえ思った。それにデビーには、才能をみとめて理解してくれるリップマンさんがいて幸せだなあとも思った。でも考えてみれば、リップマンさんも初めからデビーの理解者だったわけではない。努力するデビーの姿を見て、才能があると言ったのだ。これは、小さな女の子が一生けん命ピアノを調律している姿に心を動かされたからで、リップマンさんを良き理解者にしたのは、デビーなのだと気付いた。夢への強い思いや情熱が、周りに理解者をつくるのだ。やはり、道を切り開いて夢へのとびらを開けていくのは、その人自身の心なのだと分かった。

あんな人になってみたい、こんな人になりたい、と思ったことは、今までに何度もある。でも、いつもぼくは、ぼくの実力ではきっと無理だとか、他にもっとすごい人がいるだろうとか先に思ってしまって、自分であきらめてしまっていた。この本のデビーの姿をみて、勇気を出さなければだめだと思った。どんな人になりたいのか、何をしたいのか。それに向かって前へ進む強い心を持ちたい。